

第2章

座談会

「これまでの大阪知的障害者福祉協会の歩みと次代に伝承すべきこと」

梶間 道夫

元大阪知的障害者福祉協会会長

白土 隆司

社会福祉法人阪南福祉事業会あゆみの丘施設長

諸富 敬章

社会福祉法人マイウェイ福祉の会マイウェイいばらきワークきらり施設長

海藻 茂雄

社会福祉法人天王福祉会サンライズ施設長

佐伯 篤子

社会福祉法人光徳寺善隣館中津学園施設長

安本 伊佐子

大阪知的障害者福祉協会会長／社会福祉法人武田塾理事長

大崎 年史

50周年記念誌実行委員／社会福祉法人四幸舎和会くりのみ園施設長

岩城 由幸 (司会)

50周年記念誌実行委員長／徳島文理大学准教授

盆踊り大会 (月の輪学院、平成4年)



「感謝とふれあいの広場」イベント (第2三恵園、平成12年)



外出レクリエーションで太秦映画村に (あすなろ、平成21年)



安本 本日は、長年に亘り大阪における知的障がい福祉の発展に歴史を刻んでこられた先輩方にお集まりいただきました。司会は、記念誌の実行委員会委員長の岩城さんをお願いしました。本日の座談会には実行委員長とともに50周年記念誌発行に中心的に携わっている会長の私と実行委員の大崎さんが来ています。

我々が過去にやってきたことを踏まえて、将来に向けて歩いていくために、次の世代に伝えていかなければいけないことがたくさんあると思います。今日は、忌憚のないご意見をお話してください。

岩城（司会） 岩城です。今、徳島文理大学で教員をしていて、4年目です。その前は大阪府の職員で、砂川（砂川厚生福祉センター）に14年勤めた後、児童相談所に行きました。辞めるときは本庁におり、砂川の再編整備と、コロニー（金剛コロニー）のほうにも関わりました。

今日は、大阪福祉協会の中核で頑張られた皆さんの当時の思いや若い人に伝えたいことなどをざっくばらんにお話いただき、昨今の複雑な時代のヒントをいただきたいと思っています。

まず、自己紹介からお願いします。

白土 白土です。平成18年にコロニーの事業団を定年退職した後、貝塚にある情緒障がい児の短期治療施設あゆみの丘に勤めて、8年目になります。

梶間 梶間です。私は、平成元年に新しい施設を理事長と一緒に立ち上げて（和泉の里）、15年間施設長を務めて、70歳になったので自分から退いて9年になります。今は、1法人の理事と、2法人の監事をしています。

平成12年から16年まで、大阪福祉協会の会長をさせていただきました。私が会長としてやったことは2つしかなくて、事務局長をして

いただいていた安本さんのご尽力で福祉会館に今の事務局を置いたことと、医療互助会を立ち上げたことです。それだけだと思ってるんです。

安本 現大阪福祉協会の会長で、社会福祉法人武田塾の理事長を務めています。

梶間さんが会長のとときに私が事務局長であった話が出ましたが、それは、大阪福祉協会の事務局を引き受ける施設がなく、梶間会長の前任の会長である今道（隆之）さんが当時の事務局長であった奥野（博）さんと一緒に私のところに頼みに来られたのです。私は砂川厚生福祉センター勤務の時に今道さんに随分お世話になっていましたので、お断りできずにお引き受けしました。当時は大阪府立白鷺園の施設長をしていました。

その後、措置制度から支援費制度への移行や大阪福祉協会事務局業務の増加があり、施設が事務局を担うのは、困難であるとの判断から事務局の独立を考えました。梶間さんと場所探しを、場所が決まってからは備品や電話の設置など本当に生みのしんどさを経験しました。梶間さんとだからできたと今も思っています。全国的にみても施設から独立して事務局を設置しているのは少なかったです。

諸富 私はもともと府立の支援学校におりまして、辞めて民間の通所授産施設に行き、その後マイウェイ福祉の会の立ち上げに関わりました。茨木にできたマイウェイ福祉の会3番目の施設で施設長の急な退職のあとを務めて、今4年目です。施設は、生活介護と就労継続支援B型に整理して、多機能型でやっています。

富田林支援学校の頃——当時は就学猶予・免除のため6年生ぐらいの年齢の人が小学1年生におられた時代ですが、その頃、コロニーの児童棟と交流があり、宿泊体験に参加して利用者に食事介助をするんだけど、僕がやると吹き出

されて、ご飯粒だらけになる。コロニーの職員がやると、うまくいくんですよ。それは非常にショックで、これは随分勉強しないとイケないなと思いました。

そのショックと、それと重度の人が多く、もっと早期の、生まれて間もない時からいろいろな支援をするべきじゃないかという思いが、随分ありました。どこかそういう施設がないかなと思っているところに、昭和49年に池田市と茨木市で通所施設ができると聞き、手を挙げて茨木に行くことになったのが、児童の施設でのスタートです。

佐伯 私も、施設をつくりたいという個人の思いで、中津学園を設立しました。小さいスペースでいいと思っていたんですが、大阪市から「そう言わず、今足りないんだから50人くらいの施設にしてほしい」と言われ、社会福祉法人として設立したんです。

私は3人目の園長で、最初は私の主人で、途中で病気になり母の佐伯千代子が継いで、没後私が継ぎました。何度も「もうやっていけない」と思いながら、今日まで来ました。

最初のうちは小さい子どもばかりで、みんな寝起きを共にしながらやってきましたが、時代も変わってきました。今、障がい児と年長の人50名ほどです。その中で四苦八苦しな日々を送っています。

海藻 私は職場を11回変わっています(笑)。昭和29年に中学校の教員になって、昭和38年から知的障がいの生徒の特殊学級(現支援学級)を持った時に「これはもっと勉強しないとイケないな」と思って、京都教育大に行かせてもらいました。そこで府の先生とお会いして、高槻(養護学校、以下同。現支援学校)に誘わ



白土 隆司
社会福祉法人阪南福祉事業
会あゆみの丘施設長



梶間 道夫
元大阪知的障害者福祉協会
会長



諸富 敬章
社会福祉法人マイウェイ福
祉の会マイウェイいばらき
ワークきらり施設長

れて、それから寝屋川、教育委員会、また高槻、八尾、箕面と移って、そこで退職して東大阪短大に行き、天王福祉会から請われて茨木学園に行き、その後保育園の園長を8年しました。この4月から、(天王福祉会の)サンライズの園長をしています。

大崎 コロニーの事業団に勤めており、再編整備で特養かなびのさとを立ち上げてからコロニーを退いて、今は能勢の障がい者支援施設くりのみ園の施設長です。

平成8年と9年に大阪福祉協会の事務局を務めました。阪神・淡路大震災が平成7年1月で、私が事務局を担当した時もまだその関連の仕事で事務局が動いていて、今道さんが八面六臂の活躍をされていました。事務局時代は、今道さんや加藤(孝文)さん、栃本(善太郎)さん、若松(次郎)さんたちにいろいろ教えていただきました。

あの当時、大阪府でグループホームの数が増えていて、「集まれグループホーム」の1回目と2回目を、大阪府と育成会と大阪福祉協会が共同で企画してやったことが、非常に思い出に残っています。

昭和57年に始まったスポーツフェスタ

岩城 大阪福祉協会との関わりを、それぞれお話いただけますか？

白土 僕は、63年に役員になり、広報をやりました。そのあと何年かして、研修委員を平成4年からしました。終わった時期はよくわか



佐伯 篤子
社会福祉法人光徳寺善隣館
中津学園施設長

海藻 茂雄
社会福祉法人天王福祉会サ
ンライズ施設長

らないんですが（笑）。

海藻さんという、僕はスポーツフェスタを思い出します。それで、スポーツフェスタも調べてきました。僕は、スポーツフェスタの名付け親なんです。

海藻 そうでしたね。あの時は、いろいろ論争がありましたね。

白土 前年にバルセロナオリンピックがあったんです。だから、スペイン風に「フェスタ」という名前になった。今年で32回目ですね。

海藻 全国大会もやりましたね。平成3年だったかな。

やっぱり、体を動かすのがものすごく大切なことだと思うんです。なんでもいから体を動かして、発散すれば情緒も安定するし、非常にいいと思うんです。

岩城 始まった時って、いろいろな団体が集まったんですか？

海藻 そうです。育成会と学校と施設と、三者で。

白土 大阪養護教育振興会がありましたね。だから、四者でスタートした。

海藻 施設と学校が協力してこういう会をずっと持つてるところって、全国でもあまりないんじゃないかと思います。2000人以上参加するし、ボランティアも800人集まるし、盛大に和気あいあいとやっていますね。

種目も、陸上、バスケット、サッカー、水泳、フライングディスク、ボウリングといろいろあるから、それぞれ得意分野で頑張れます。

安本 始まりはいつ頃ですか？

海藻 昭和57年5月に、第1回スペシャルオリンピック大阪地区大会をやっています。2会場で、1670人集まって。毎年やっていますから、今年で32回目です。3000人という時もありましたね。

安本 名付け親が白土さんというのは、初めて知りました。

課題をみんなで真剣に検討した

佐伯 私は、梶間さんが会長の時に児童施設部会の部会長をさせていただきました。

関わり始めたのは月の輪（月の輪学院）の加藤さんが部会長をされていた頃で、安城二美子さんがすごく活発に取り組まれていました。加藤さんは行事に強い思いがあったみたいで、部会のほうを私に振られたんでしょう。

私が部会長の頃は、みんな先のことを読んでいました。児童施設で成人の人が増え始めていたので、児童施設にアンケートを採って部会で話し合い、全国愛護（日本精神薄弱者愛護協会。現日本知的障害者福祉協会）の研究誌で報告したこともあります。みんな真剣に、児童が大人になって行く場所がなかったらどうなるのか、相当話し合いました。当時の予測が、今その通りになってきていますが……。

白土 昭和52～53年は、年長児のことは全国的に問題になりましたね。作業所の連絡会ができたのが51年で、あの頃から親御さんが「待つてられない」と動き始めた。

安本 親の会による無認可の作業所が、地域でどんどんできましたね。

白土 無認可なので、法人化の問題がありました。

岩城 諸富さんは、どうですか？

諸富 昭和62～63年だと思うんですけど、

明光（明光学園）で濱（融）さんと知り合ったんです。63～64年ですかね、それまでは府関係の幼児の通所施設で役員を持ち回りしていたのをもっと広げたいということで、児童の通園施設の部会長になりました。平成5、6年くらいまで続けたでしょうか。

その頃は、随分「早期発見、早期治療」が言われました。それで1歳児検診とかの検診が充実してくると、そのあとのフォローをどうするかが、かなり問題になった時期です。大阪福祉協会が府の委託を受けて、レポートを作りました。

大崎 「地域療育の構築」についての報告書がありましたね。

◆ 会長選挙からの転機と互助会発足

梶間 施設長をしていた施設の隣に熊取療育園があって、今道さんがおられたんです。一緒に運動会をするなど、絶えず顔を合わせていました。

ある時、「私はもう（大阪福祉協会の）会長を辞める、次の会長をやってもらえないか」と言われたんです。驚きました。その前にちらっと、今道さんに「互助会のようなものを作りたい」と話していたのが頭の中にあっただのかもしれませんが。事務局長だった砂川の奥野さんと2人で、何回も来られるんですよ。僕は「いや、それは」とお断りしていたんですが、理事長も「今道さんがそれだけ言われるなら、一度どうや」と言われまして。

でも、私以外に候補がおられると聞いて「身を引かせてもらいます」と言ったんですが、今道さんは「それは困る」と。それで、全国の福祉協会でも前代未聞だったと思いますが、選挙で決まったわけです。

私は55歳まで一般のサラリーマンで、小さ

な地域の作業所をサポートしていただけなので、本当に福祉に携わったのは15年間だけでした。その中で会長は、正直辛かったですね。

それから、コロニーに事務局を引き受けてもらえないということにもなりました。

白土 平成5年に、うちの事業団に明光が一緒になったんですよ。それで、砂川とうちの事業団と2か所で、しばらくは事務局をやったんですけど……。

安本 梶間さんの時代に立ち上げた互助会は、平成20年度から全国知的障害児者生活サポート協会に加盟し、大阪知的障害児者生活サポート協会として活動しています。大阪の加入者は約6000人、全国では約10万人が加入しています。梶間さんの時代に蒔いた種が育ってきています。

現在は任意団体ではありますが、今後の活動を考えますと、法人化を進める時期にあると認識しています。

佐伯 大阪の互助会発足の時に、うち是最初に入りました。発足の時の会議にも出ましたし、保険会社の説明も聞きに行きました。

あの頃は、他の保険会社では障がい者は保険に入れなかった。保護者に声をかけたら、「入れるんだったら」と喜んでもらえました。あれがあってすごく助かっていて、ずっと続けます。全国でも早かったんじゃないですか？

梶間 全国では10何番目でしたけど、給付をちょっと良くしたんです。他では、半日では駄目で1日24時間ないと給付しないとかがでしたが、大阪では12時間でもいいことにした。

最初の年は、900人でスタートしました。今6000人にまでなったんですよ。今となってみると、AIU（AIU保険会社）に任せたのが良かったかなと思います。お金のことだから、ややこしいことにもなりやすい。当時は、なんでよそ

に任せるんだという見方もありましたが、事務局ではできないですから、任せて良かった。

大阪福祉協会が拠り所だった

岩城 大阪福祉協会の運営は、どうされてきたんですか？

白土 運営体制としては、会長と、副会長が何人か。それと、各部会——研修、広報、行事がありました。事務局体制は、会計が1人いました。

諸富 大抵2人いましたね。ほとんどが会計担当でした。

白土 一応、総務と会計の2人体制ですね。

安本 府立の施設（砂川厚生福祉センター、明光学園、金剛コロニー）が2年毎の持ちまわりで担当していました。本来業務のかたわらになりますので、十分なことはできなかったようです。

岩城 仲良くワイワイやってたんですか？

海藻 そうです。我々の拠り所です。

諸富 事業は、研修を主にしていましたね。今も、いろいろな研修があります。

海藻 やっぱり、職員の資質向上が一番ですから。

安本 大阪福祉協会の組織として研修委員会があります。活動の一環として研修の企画や段取りは研修委員長が中心に行なっています。

諸富 部会は、部会ごとに予算が割り当てられて、それを使うわけです。報告書も作ってね。

岩城 予算が部会に降りてくるわけですか？

佐伯 10万円ぐらいもらったのを覚えてます。どうやって使おうかなって（笑）。

岩城 部会長さんは結構大変ですね。考えて、そのお金を使う。

諸富 大変ですよ。お金が足りなくなると、

貸してくれそうな所を回らないといけないし（笑）。

良かったのは、施設を研修の場にさせてもらって、いろいろな施設間の交流ができたこと。それだったらお金もいらなしね。

安本 企画は研修委員長からの提案あるいは役員会で協議など、様々です。年度当初の事業方針に則って考えますが、役員会でもいろいろな意見が出ます。

梶間 そうですね。それで意見を言った人に、「講師を頼んできて」と言うことも何度かありました（笑）。

安本 今は、文書の発送などは事務局でしています。当日は、手が空いた人が受け付けをしたりしていますね。

ソフトボール大会は利用者が楽しみにしている

岩城 スポーツフェスタと別に、ソフトボール大会をずっとされていますね。

安本 今年で47回だから、半世紀近く続いています。

白土 始められたのは、明光の西（季男）さんですね。必ず6月の第1木曜日に、久宝寺であるんです。

安本 最初から久宝寺だったんですか？

佐伯 いえ、慈光学園のグラウンドでしたね。うちは、第1回から毎年欠かさず出てると思います。上手でなくても、みんなと参加するのをすごく楽しみにしています。

海藻 多い時で40チーム出てましたが、今は19チームに減っています。やる人が減っているのと、他のレクリエーションも増えているので。ソフトボールもおもしろいんですが、練習の場所もいりますから。

安本 強いチームだったコロニーとか明光が参加してないです。

大崎 みなさん歳をとられた証拠です（笑）。

安本 施設利用者の重度化や高齢化によりソフトボールのできる人も少なくなっています。それと地域で就労し働いている方は平日の参加は難しいです。

海藻 でも、梅田に行っても難波に行っても、最重度の人などお目にかからない。そんな利用者が、納涼大会になると目や表情がほころびます。すぐわかります、ものすごく喜ぶんです。やっぱり生活にいかに変化をつけて、いかに楽しむ機会をつくるかですね。

だから、ソフトボールもできるだけ続けて、喜んでおられる方々のために尽くす。当天王福祉会は出場していないけれど茨木学園園長の浦野（秀樹）さんがちゃんと段取りして、やっています。

安本 ソフトボールは慈光学園（現・明光学園）の西さん、月の輪学院の加藤さん、金剛コロニーの古市（昭徳）さんなど、名物職員が頑張ってきました。

諸富 施設は増えてますけど、そういう余裕のある施設がないですね。

海藻 夜と昼が分かれて手が足りないとかもあります、やっぱりスポーツの機会はなんとか復活させてあげたいですね。

佐伯 子どもたちは楽しみにしてるんです。学校が休みの土曜日に、昼からボランティアさんが来て淀川の河川敷で練習したり、公園を借りたりする。ソフトボールって、女の子も男の子も一緒にできますし、小学1年生くらいの子でも軽度の子は「やりたい」と言って練習に入ります。

白土 行事委員会って、ソフトボールだけ



安本 伊佐子
大阪知的障害者福祉協会
会長



大崎 年史
50周年記念誌実行委員／
社会福祉法人四幸舎和会く
りのみ園施設長



岩城 由幸
50周年記念誌実行委員長
／徳島文理大学准教授

やってたんじゃないですよ？

安本 あと、スポーツフェスタですね。

白土 スポーツフェスタのしつらえを、行事委員会が全部やりましたね。加藤さんとか…

安本 古市さんとか。

白土 「大道具はうちしか置けないから」って。今、茨木学園さんですね？

海藻 そうです。それで、浦野園長が朝一番早く行って、一番遅くまで残る。片付け終わったら、もう明るく日になろうかというくらい。

安本 学生ボランティアが減ってきてますね。

白土 昔は、クラブの先輩が後輩を連れてきてくれたりしたけど。

安本 以前は、ボランティアに参加することで、学生は単位の取得にカウントされると聞いていましたが…今はどうなのでしょう。

「万歳、万歳」はいつから始まったんですか？

白土 フェスタになって2年目です。「3巨頭」がおられるでしょう、井上（幹一）さん、花岡（安彦）さん、高田（昭夫）さん。その方たちと、育成会の鎌田（浩二）さんが、表彰を全部やっています。

梶間 全国障害者スポーツ大会の第2回が岐阜で、団長で行った時に、「万歳」をやるのは大阪だけだと言われました。本人がメダルをもらって戻ってくると、周りには全員が「万歳、万歳」。他県の方はキョトンとしている（笑）。

障がい者施設は人気薄？ 人材確保に苦労

岩城 今、学生の実習先でも、障がい者施設は人気がないです。応募者を集める方法とか、どうされていますか？

海藻 過去、幼児教育の学科で教えていた頃、幼稚園教諭免許と、保育士資格と、社会福祉主事任用資格を取るため学生が幼稚園、保育所、障がい者施設に実習に行くんですが、「幼稚園や保育園はとても厳しいけれど、障がい者施設は利用者もゆったりしてるし、職員が優しい」と言います。

それは、利用者が純粹だから。だから職員も言葉とかが純粹になってくるので、実習生に対しても優しく振舞うから、非常に感動して帰ってくる。「私は幼稚園や保育園じゃなくて障がい者施設に行く」という学生も多くいました。

経験しないとわからないから、納涼大会、運動会、餅つき大会にもボランティアとして誘うといいと思います。やっぱり、なにが楽しくやりがいかというと、障がい者が生き生きすることとか、スキンシップとか、人が優しいことでしょう。

天王福祉会は現在5人内定していて、生活支援員として働く栄養士の女性もいます。その学生はもう何回も見学に来ていて、「障がい者施設に就職したい」と。栄養士の養成校だから実習に行ったことがないけれど、それでもくるのは、障がい者施設に魅力を感じて来るんでしょうね。ありがたいと思います。

白土 最近、障がいの施設は、人気落ちていきますよ。

佐伯 うちも困ってますよ。今はすぐ募集しないとイケない状況ではないですが、足りなくなると、福祉人材センターに募集をかけます。福祉人材センターでは、「大阪府職場体験事業」

という制度があり、就職希望者は、採用前に施設で何日間か職場を体験することができて、その間の保険と体験受け入れ費用などを負担してもらえるなど便宜を図ってもらえます。

子どもの定員数に対する職員数が足りていてもその通りにはいかないから、年じゅう「足りない、足りない」というのが、職員の声です。1人でも2人でも余分にいないといけなくて、正職員というわけにはいかないの、非常勤職員が増えてきています。

大崎 うちも人材確保には苦労してます。来月の施設長会議のテーマは、人材確保です。大学の福祉学科は増えてるんですが、障がいのほうには全然人が回ってこないのが現実です。

それと、うちは入所施設なんですけど、入所と通所なら、通所のほうが人気が高いです。

諸富 いや、通所も集まらないよ（笑）。うちもだけど、最低基準より少し多めに採るようにしているからなんとか間に合ってるけど、人探しは年じゅうやってます。

大崎 そうですね。福祉人材センターとか公的などところに募集をかけても来ないから、大手求人サイトのリクナビとかマイナビにお金を出して、やっと振り向いてくれるかなというのが現状です。

諸富 景気がよくなると、なおさら来ないですね。今、ちょっと景気が上向いてるでしょう。募集してるけど、来ないですよ。景気の影響を、もろに受けますね。

職員育成のために大阪福祉協会が何をするか

安本 なかなか施設ではコアになる職員の育成が難しく、育つ前に辞めていく。スーパーバイザーを配置し日々の実践の中で支援者を育てる余裕がないのでしょうか。

諸富 「サービス管理者」がありますが、あ

れは講習を受けているというだけになりがちですからね。仕事のスキルを、どこかできちんと時間をかけて指導できる場所があればいいんだけど。

安本 今、施設で記録の指導すらできないこともあります。

白土 僕は研修委員長をしていた頃から、大阪福祉協会で認定資格を出すような体系的な仕組みを作るべきだとずっと言ってきました。言うだけでしないのは自分が悪いんだけど（笑）。単位制で、最低限これだけはみんなできるようにというものを大阪福祉協会で用意して、あとは各施設で積み上げていくような仕組みで、ベースになるものを大阪福祉協会でできたらいいなと思います。

安本 そういう役割が必要ですね。今年は新任研修を3回シリーズで実施しました。

今年は5年未満の方を対象にしましたので、次は5年以上の方を対象にした研修企画を考えています。いずれにしても計画的、継続的にやらなければ……。

諸富 私は、ある面では大阪福祉協会が丸ごと抱えなくてよくて、その一端は施設が持つのもいいと思う。職員がそれを受けられる代わりに、残りの部分は施設でやり通すというように。施設が持っている力も高まってくるし、そういうことも考えていいと思います。

白土 障がいの施設は、第三者評価義務化の方向にはまだいきませんか？

安本 まだなってないです。児童養護施設は義務化されていますが。

白土 きちんとやるなら、職員一人ひとりのキャリアのための個別の研修計画を作ることが当然求められます。そのベースの部分で、これだけは大阪福祉協会がやるというふうになればいい。

安本 来年はその辺を課題にしてやりたいですね。

第三者評価にしても障がい関係施設はまだですが、児童養護施設武田塾では受審しましたが、改めてチェックされる項目を確認することを通じて、日頃やっているつもりができていないことに気づくことになったり、第三者評価制度の意義を実感しました。

◆ これからの大阪福祉協会に期待すること

岩城 最後に、大阪福祉協会にこうなってほしいとか、後輩たちにこんなことを期待するなどを、一言ずつお話いただけますか。

佐伯 やはり、研修が大阪福祉協会の根本ですね。このまま続けてもらって、職員の資質を伸ばしてほしいです。一施設だけではなかなかできないので。栄養士さんの研修とか事務職の研修とか、いろいろな分野の専門的な研修の場もあるといいです。虐待問題も、どこでもいつ起きるかわからないですし、研修が欠かせないと思います。

施設間の交流もすごく大事です。他の施設を知らずに日々の仕事だけしていると、視野が狭くなりますから。以前は、児童施設では各施設から何人かずつ参加して交流して、1日楽しんで帰ってくる行事もありました。大きな全体のキャンプもありましたね。今はなかなか難しいと思いますが。

どんどん制度が変わりますが、大阪福祉協会では説明会があった時も児童の話が全くなくなりがっかりして帰ったことがあります。成人中心の話が多いので、全体に浸透するように配慮してもらえたらいいですね。

海藻 職員には、「感性が大事」と言っています。配慮や気づきは、言われてやるんじゃなく、反射的にできないといけない。それには、

学問の知識じゃなく人としての知恵が大切で、経験をより多く持って、気づいていくことです。私は常に言うんですが、「人生は変容」です。人は変わらないといけない。声のかけ方、コミュニケーションの仕方や心のこもった接し方で、利用者も変わっていきます。職員はそれに喜びを感じるんですね。

もうひとつ思っているのは、教育と福祉はもう一体になってますが、医療との連携が大切じゃないかということです。知的障がい者は、自分で訴えられないでしょう。最近、ある施設で筋ジストロフィーの利用者が、40歳で亡くなりました。筋ジストロフィーであることが発見されたのが、36歳です。定期的に検診など行なっていればもっと早く発見できたし、対処もできたでしょう。

知的障がい理解のあるクリニックも、少ないです。知的障がいがあるというと、「ちょっと難しい」と断る医師もいます。だから、もっと医療面で連携を図って、健康面で配慮をしていかなければいけないと思っています。

大崎 虐待問題についてですが、6月に幹事と、虐待問題に対処された施設を訪問しました。7月に振り返りを目的として集まり、当時の職員さんに若い職員がいろいろ聞くというグループ討議をしました。すると、10人が10人とも、「自分の施設でも起こりうることだ」と言います。じゃあ、それを防ぐには何が必要かと問うと、「専門性を身につけることだ」と答える。皆さんわかっておられるので、それを大阪福祉協会が研修やいろいろなやり方で彼らに継続して示していければ、虐待はなくなると思っています。

それと、それでも改善しない場合は、施設訪問コンサルテーション事業などを受けられるようにすればよいと思います。そういう事業をこ

れからも続けてほしいと思っています。

法人格を取って、今まで以上に社会的な責任が大阪福祉協会にはあると思うので、中央に意見をもっと出していけるような協会であってほしいです。

梶間 自分が関係している施設を見ても、やはり職員が外に出ていく回数が少ない。ということは、そういう機会をどこかで与えないといけません。そうしないと、職員の資質を伸ばす教育ができない。他人と触れ合うことで他人とわかり合い、他人が知っていることを教えてもらい、その他自分の身についていないことを身につける場所を、提供しないといけません。施設内にずっといて、自分たちだけの常識を作ってしまう状況が、たまに施設に行くからこそ見えることがあります。

今いる職員にもう一度勉強してもらおうような機会を大阪福祉協会が作り、主体性を持って各施設に働きかけてほしいと思います。

諸富 皆さんと同じようなことになりましたが、やはり感じなかったら何も得られないから、私もスキルよりも感じる力だと思います。外に出ていくことも大事だし、研修もありますが、目の前の人たちを何とかこんなふうにしてあげたいという気持ちがない限り、感性を磨きようがないですね。そこは、全体的な研修で学んでも現場ではなかなかできないものなので、施設単位でやることでもあります。

それから、「施設から地域へ」の流れの中で地域での定着もしてきているんですけど、日中活動の場と生活の場と別に、もうひとつ肝心なのが余暇活動です。自宅にいる人でもグループホームにいる人でも、土曜・日曜をどう過ごすかは非常に重要ですね。ガイドヘルパー制度を使ってどこかに出かけるにしても、ある程度限られたところになるし、個別的な対応が多くな

るので、もう少し集団で何かやる機会がないかなと、いつも思っています。ですから、ちょっととんでもない話かもしれないけど、例えば大阪福祉協会がそういうメニューをたくさん作って、利用してもらおう。実際に利用する時は、ヘルパーさんに来てもらってになります。

障がいを持っている方の高齢化問題も気になります。グループホームに入っている人も入所施設に入っている人もその先が見えないし、老人関係の施設にも入りにくいでしょう。歳をとるとどうなり、どういうスタイルがいいのか模索して、提言みたいなものを作らないといけないのでは。法律や条例は、実践活動から生まれてきますから。

職員研修は、認定制度でもいいし単位制度でもいいので、きちんとした形で押さえられる研修がほしいですね。

白土 ひとつは第三者評価のことで、第三者に来てもらってお金をかけなくてもいいけど、自己評価を毎年必ずやれるような発信を、大阪福祉協会ができたらいいいですね。

それから気になっているのは、契約になって10年経ちますが、どれくらい法定後見人がついていて、ついていない人はどのくらいの割合なのか。必要な後見制度の利用についても旗を振ってもらえたらいいかなと思います。

3つ目は、できるだけお金をかけずに効果的な研修をする方法です。各施設にいいものを持っている人はいるから、講師を3人ずつ出してもらったらいいと思うんですよ。人に教えるのは一番いい勉強でもありますし、そういう立場になれる人を施設の中に作っていく仕組みを持つことが大事ではないでしょうか。



なんなら会場もその施設にして、見学して帰ってくる。大阪福祉協会の中でのオープン化を図ることで、虐待の問題なんかも徐々にクリアしていくかもしれません。

諸富 施設の評価は、大阪福祉協会がある程度やってもいいんじゃないですか。

安本 そう思います。大阪福祉協会は知的障がい児者支援に携わる専門機関の団体であります。知的障がい福祉に関わった経験豊かな人材がたくさん存在していますので、我々の団体が今後第三者評価機関になることも考えていかなければならないと認識しています。

本日お集まりいただいた先輩方の皆さんから、知的障がい福祉、大阪福祉協会のありようについて熱き思いを語っていただきました。本日の貴重なご意見を参考に大阪福祉協会の今後の活動のありようを考えていきます。今後の活動を見守っていただくとともに、常に我々の活動にいい意味でのお節介をしていただきたいと思います。本日はありがとうございます。

(平成25(2013)年8月19日実施)



みなさんからの応援メッセージ

障がい者が穏やかで充実した 人生の主人公であるため

北海道療育園 常務理事
岡田 喜篤

確かなソーシャルワーカーを擁する入所施設を実現してほしい。どのような状況にあっても、クライアントを正しく理解し、代弁し、ニーズを明らかにし、適切な支援をもって徹底的に守り抜く、そんな施設であってほしい。

残念ながら、わが国、社会は、なお当分混迷を続ける可能性が高い。一人の知的障がい者がどんな時でも大切にされるという仕組みは、理念やタテマエだけでは実現しない。志と優れた機能をもつ組織が必要です。

精神薄弱という呼び名からの連想

日本自閉症協会 顧問
石井 哲夫

かつて、「精神薄弱」という呼び名があった頃から、知的障害の人や知的障害を伴う自閉症を支援したり、軽度知的障害の二次障害としての人格障害にも取り組んできました。最近は、「発達障害」という呼び名をつけて自閉症を高機能化して考えていますが、この際、知的障害を支援している人たちに、精神薄弱といった時のような広い対象領域で大同団結して欲しいと思っています。自閉症スペクトラムや、パーソナリティに関わる多くの二次障害を理解できる支援者が少ないからです。

ここに皆さんに支援同志として、期待を込めてメールを送ります。

知的障害者福祉協会への期待

社会福祉法人大阪府社会福祉協議会 会長
総山 哲男

50年の長きにわたり知的障がい児・者の福祉向上にご尽力されてきた業績に、まずは敬意を表します。

平成24年10月1日、障がい者に対する虐待防止の重要性を明記した「障害者虐待防止法」が施行されました。これまで障がい者の人権に関する研修会の開催等、知的障がい者の自立と社会参加をめざして取り組んでこられた貴会の役割はますます重要になるものと考えます。

これからも大阪の知的障がい児・者の方々が、笑顔で力一杯生活できる社会づくりに向けて共にがんばって参りましょう。

歴史を超えて想いをつなぐ50年

社会福祉法人産経新聞厚生文化事業団 専務理事
大船 一美

平成24年春、私たちの法人で一番古くなった施設の建て替え工事が完成した。施設の老朽化で必要に迫られての工事。建物は竣工から43年が経っていた。協会創立50周年……。この歴史の重さは言うまでもないが、協会の理念や趣旨を綿々と引き継いでこられた関係者のご努力に敬服している。

先ごろ「大阪知的障がい児・者合同ソフトボール大会」に出向いた。47回目を迎えたという。こちらは、微力ながらこの事業支援を続けてきた我が法人の先輩に感謝したい。